

ヴィクトリア朝の服飾表現にみる女性の自立と身体観に関する研究  
Victorian Women's Independence and their Body Images Shown  
through their Selecting Costumes

佐々井 啓<sup>\*1+</sup>, 坂井 妙子<sup>\*2+</sup>, 好田 由佳<sup>\*3+</sup>, 山村 明子<sup>\*4+</sup>, 米今 由希子<sup>\*5+</sup>,  
Kei Sasai<sup>\*1+</sup>, Taeko Sakai<sup>\*2+</sup>, Yuka Koda<sup>\*3+</sup>, Akiko Yamamura<sup>\*4+</sup>, and Yukiko Komeima<sup>\*5+</sup>

\*1 日本女子大学家政学部 東京都文京区目白台 2-8-1

Faculty of Human Sciences and Design, Japan Women's University,  
2-8-1, Mejirodai Bunkyo-ku, Tokyo, Japan

\*2 日本女子大学人間社会学部

Faculty of Integrated Arts and Social Sciences Humanities, Japan Women's University,

\*3 堺女子短期大学美容生活文化学科

Department of Beauty and Life Culture, Sakai Junior College

\*4 東京家政学院大学現代生活学部

Faculty of Contemporary Human Life Science, Tokyo Kasei Gakuin University

\*5 明星大学教育学部

School of Education, Meisei University

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化学園大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Gakuen University

Abstract: The purpose of this project is to clarify Victorian English women's body images and their relations to women's sense of independence, through the examinations of contemporary women's magazines. In examining women's magazines, the members of the project focus on the following five issues: 1. Theatrical representations of women characters ("New Woman") and their dresses, 2. How physiognomical observations are reflected in the presentations of dress accessories, 3. Women's outdoor activities and the dresses developed for such occasions, 4. Leisure sports for women and the dresses, 5. Japonism and its influence on women's dress. All these subjects are important to understand Victorian women, since they reflected their changing attitudes towards their bodies, and eventually played significant roles in modernizing their sense of independence. The members examine women's magazines stored not only in Japan but also in the U. K. Such an extensive research on this topic is unprecedented, and therefore, our project contributes to the advancement of documentary information of Victorian women's magazines.

It is true that most of five subjects mentioned above have been studied independently, but they have never been studied with an emphasis on the intensive research on women's magazines, nor on women's (in particular, rising middle-class women's) dresses, nor on women's outdoor activities which became widely

---

\*1) sasai@fc.jwu.ac.jp

available in mid-Victorian period. Since we investigate the subjects on a reciprocal basis, we can visualize women's life in Victorian society. By reconstructing Victorian women's body images and their conscience, we can find out the following results. 1. The concepts of "New Woman" are represented not only by their provocative behaviours such as smoking in public, but also by wearing a practical tailor-made dress. 2. Women's magazines use physiognomical knowledge that inner motions and characters can be seen through by the appearances, when they present dress accessories. It is not only when introducing high fashion which humble middle-class readers might not be familiar, but also when briefly mentioning standard outer-garments such as shawls. Readers, in turn, use such extensive information to modernize their self-images. 3. Women who have progressive ideas of occupations, marriages, and their own body images tend to select simple dresses. They believe it is the best way to signify their physical and mental independence. 4. Tailor-made style dresses for leisure sports have dual functions: one is functional for physical activities, and the other is that its clothing constructions enable the dress visualize the idealized bodyline of the wearer. 5. The popularity of Japonism enabled English women familiarize flat structures of Japanese Kimonos. Accordingly, increasing numbers of English women wore Japanese style garments, and by doing so, they began to think about their own bodies.

## 要旨

本研究の目的は、ヴィクトリア朝期のイギリス人女性の身体観と、自立に対する意識を同時代の女性誌の文献調査から明らかにすることである。女性誌を研究するにあたり、本研究の構成員は、以下の5点に注目した。1. 演劇に於ける女性登場人物(「新しい女性」)の表象と衣服、2. 観相学的観察はどのように服飾小物の演出に反映されたか、3. 女性の戸外での活動と衣服、4. 女性のためのレジャースポーツと衣服、5. ジャポニスムと女性服に於ける影響。これらの項目は、ヴィクトリア朝期の女性を理解する上で重要である。なぜなら、彼女たちの身体観の変化を示し、さらに、彼女たちの自立に対する感覚を近代化する際に、重要な役割を果たしたからである。文献調査は、日本、イギリスの両方で行った。こうした広範な調査は類を見ない。本研究を通して、ヴィクトリア朝期の女性雑誌の文献情報の確立にも、大きく寄与すると考える。

確かに、上記の5項目は、個別にはすでに研究されている。しかし、女性誌との強い関連からの研究、女性(特に、台頭しつつあったミドルクラスの女性)の衣服との関係、ヴィクトリア朝中期に広く行き渡った女性の戸外活動との関係から研究されたことはない。本研究は、これらを相互関連的に網羅することで、ヴィクトリア朝社会に生きた女性の生活を視覚化することが可能となる。ヴィクトリア朝期の女性の身体観と感性を再構成することで、本研究は以下の結論を得た。1. 「新しい女性」の概念は人前で喫煙するなどの、挑発的行為のみならず、実用的なテーラーメイドのスーツを着用することで表象された。2. 女性誌は、内面やキャラクターは外面に現われるという観相学の視座を、服飾小物を呈示する際に広く使用した。それは、つつましいミドルクラスの女性にはなじみの薄いハイファッションを紹介する時のみならず、外出の定番アイテムであるショールに言及する時にもそうであった。読者はその情報を参照し、セルフイメージの近代化に役立てた。3. 女性の仕事、結婚、身体観に進歩的な考えを持つ女性は、シンプルな衣服を選択する傾向があり、そうすることで、彼女たちの身体的、精神的自立を表象しようとした。4. レジャースポーツのためのテーラーメイドスタイルの衣服には、二面性がある。一つは身体活動に適した機能性、もう一つは、衣服の構造が着用者の身体を理想的に見せることである。5. ジャポニスムの流行は、イギリス

人の女性たちに着物の平面構造に親しむ機会を提供した。それに伴い、より多くの女性たちが着物風の衣服を纏うようになり、彼女たちの身体についても考えるようになった。

## 配当決定額

平成 22 年度	412,000 円
平成 23 年度	1,097,000 円
平成 24 年度	907,000 円
合計	2,416,000 円

## 研究の目的

これまで 19 世紀の服飾研究は、主としてフランスの遺品やモード誌の分析に依るところが多かった。モードを牽引したフランスの研究は重要であるが、ヨーロッパの他の国々においては、必ずしもフランスの追随にとどまるのではなく、独自の服飾文化を形成し、それぞれの価値観を生み出していることが指摘されている。そこで、本研究は、イギリス・ヴィクトリア朝の社会に注目し、女子教育の普及と女性の自立に対する意識の高揚が女性雑誌の普及と関連があることを明らかにする。すなわち、女性雑誌を網羅的に研究して記事を分析し、文献情報を確立することを目指すとともに、これまで概説書等では十分に明らかにされていなかったヴィクトリア朝の女性の自立と身体観に関する実態を、演劇、キャラクター、アウトドアファッション、レジャースポーツ、ジャポニズムの観点から明らかにする。

## 研究の方法

19 世紀に刊行されたイギリスの女性雑誌を調査し、それらの記事を分析して、服飾表現を通して女性の生き方を明らかにする。22・23・24 年度は、文化学園大学図書館および、国内の図書館に所蔵されている雑誌を取り上げ、調査するとともに、最終目的である女性の自立と身体観についての資料を収集した。

ヴィクトリア朝社会に関する様々な視点からの研究に関する知見を深めるために、女性雑誌、女子教育、階級制研究を手掛ける研究者に講師を依頼し、3 回にわたる研究会を開催し、ヴィクトリア朝研究の課題を探り、広く議論し、問題意識を明確化した。

23・24 年度にはイギリスの図書館において、日本国内では入手困難な雑誌の現物調査を実施した。また、23 年度には島根県立石見美術館においてヴィクトリア朝期のスポーツ服の調査を実施し、当時の女性雑誌に掲載されたスポーツ服との関連性を検討し、現存するヴィクトリア朝期のドレスにおいて物的側面からの根拠を与えた。

## 研究の実施計画

### 「平成 22 年度」

本研究では、女性雑誌という特殊性から、これまで、その資料の重要性が服飾史研究において見過ごされてきた事実を踏まえ、ヴィクトリア朝の女性雑誌が女性の生き方をも知ることが可能とする価値のある一次資料であることを明らかにしていく。しかし、雑誌という特殊性から体系的に収集することが困難である点や、所蔵先も周知されていない状況にある。

そこで、平成 22 年度は、まず第 1 に、文化学園大学所蔵図書を中心としてヴィクトリア朝女性雑誌を網

羅的に研究して記事を分析し、文献情報の確立を目指す。各自の専門領域の研究にとどまらず、「ヴィクトリア朝雑誌文献に関する資料集成」としての統括的な研究データをまとめる。

*The Ladies' Companion* (文化学園大学図書館)

*The Ladies' Cabinet of Fashion, Music and Romance* (文化学園大学図書館)

*The Queen* (文化学園大学図書館、日本女子大学)

さらに、次の女性雑誌を国内の図書館等で調査し、同様の分析を行う。

*The Englishwoman's Domestic Magazine* (日本女子大学)

*The Myra's Journal of Dress and Fashion* (日本女子大学)

*The Sketch* (日本女子大学)

*The Woman's World* (日本女子大学図書館)

*The Girls Own Paper* (梅花女子大学図書館) 他

これらの雑誌の調査において、研究テーマ(1. 演劇、2. キャラクター、3. アウトドアファッション、4. レジャースポーツ、5. ジャポニスム)にしたがって記事の収集を行っていく。第2に、ヴィクトリア朝研究の課題を明確にし、他分野の研究者のヴィクトリア朝研究から知見を得るため、研究会を開催する。

「平成23年度」

平成23年度は、まず第1に、従来の女性学的な視点を深めるために、平成22年度に引き続き、日本国内の女性雑誌等を検討することにより、より具体的な服飾表現とのかかわりを明らかにする。追加した資料は以下のとおりである。

*The Lady's Realm* (同志社大学アメリカ研究所)

第2に日本で入手困難な女性雑誌に関して、イギリスでの調査を実施する。

*Illustrated Sporting and Dramatic News* (British Newspaper Library)

*The Lady: A Journal for Gentlewomen* (British Library)

*The Gentlewoman: An illustrated Weekly Journal for Gentlewomen* (British Library)

*The Lady's Magazine* (National Art Library)

*Lady's World* (National Art Library) 他

「平成24年度」

最終年度として、まず第1に、これまで行った雑誌に加えて、新たな雑誌の分析を追加して行う。主として文化学園大学図書館、国内の図書館等の調査と、イギリスでの調査を実施する

*The New Monthly Belle Assemblée A Magazine of Literature and Fashion* (文化学園大学図書館)

*The World of Fashion* (文化学園大学図書館)

*Young Ladies' Journal* (文化学園大学図書館)

*Lady's Pictorial* (日本女子大学)

*The Ladies Treasury* (日本女子大学)

*Blackwood's Lady's Magazine and Gazette of the Fashionable World* (National Art Library)

*The Court Magazine Monthly Critic and Lady's Magazine* (National Art Library)

*Le Moniteur de la Mode* (National Art Library)

*The Season: Lady's Illustrated Magazine* (National Art Library)

*Young Englishwoman* (National Art Library) 他

最終年度として、22年度、23年度に収集した資料を統合し、文献情報を確立する。第2に、ヴィクトリア

朝の女性の自立や身体観の変容が、当時の女性の生き方を方向づけた重要な要素であることを明らかにする。ヴィクトリア朝の服飾研究・ジェンダー研究を、雑誌記事の分析を改めて行って総合的に進展させることにより、他分野のヴィクトリア文化研究に一石を投じることになると考える。

## 研究の成果

### 1. 国内外の文献情報の確立

#### (1) 調査機関

(日本) 文化学園大学図書館、日本女子大学、同図書館、梅花女子大学図書館、同志社大学アメリカ研究所、大阪大谷大学図書館、神戸松蔭女子学院大学図書館、島根県立石見美術館他

(イギリス) British Library, British Library Newspapers, National Art Library, Victoria and Albert Museum

#### (2) 調査対象雑誌

*The World of Fashion* (1824-1922)

*The New Monthly Belle Assemblée A Magazine of Literature and Fashion* (1834-1870)

*Blackwood's Lady's Magazine and Gazette of the Fashionable World* (1836-1860)

*The Court Magazine, Monthly Critic and Lady's Magazine* (1838-1847)

*Ladies' Companion at Home and Abroad/ Ladies' Companion and Monthly Magazine* (1849-1870)

*The Ladies' Cabinet of Fashion* (1852-1870)

*The Englishwoman's Domestic Magazine* (1852-79)

*The Ladies' Treasury* (1858-1895)

*The Queen* (1861-1917)

*Young Ladies Journal* (1864-1920)

*Young Englishwoman* (1865-1877)

*Illustrated Sporting and Dramatic News* (1874-1943)

*Myra's Journal of Dress and Fashion* (1875-1912)

*The Girl's Own Paper* (1880-1901)

*The Lady's Magazine* (1880-1892)

*Lady's Pictorial* (1881-1921)

*Le Moniteur de la Mode* (1882-1896)

*The Season: Lady's Illustrated Magazine* (1885-1890)

*The Lady: A Journal for Gentlewomen* (1885)

*The Woman's World* (1887-1890)

*The Gentlewoman: An illustrated Weekly Journal for Gentlewomen* (1890-1926)

*The Sketch* (1893-1959)

*The Lady's Realm* (1896-1916)

*Lady's World* (1898-1926)

#### (3) 文献情報

ヴィクトリア朝期に刊行された女性雑誌に関して、出版年、出版社、価格、刊行頻度、所蔵機関を調査し、読者層や記事の内容を記している。特筆すべき点は、服飾に関する記述や挿絵に焦点を当て、文献情報を確立した点であり、この文献情報から、ヴィクトリア朝社会に生きた女性の生活を網羅的に

知ることが可能となった。

## 2. ヴィクトリア朝の服飾表現にみる女性の自立と身体観

### (1) 演劇にみる「新しい女性」

1893 年ごろから女性の新しい生き方を描いた小説が登場し、1894 年 9 月 1 日に、ロンドンで『新しい女性 *The New Woman*』という劇が上演された。「新しい女性」を表す作品や当時の風潮から、女性解放の 3 つの象徴としてあげられるのは「ドアの鍵」、「煙草」、「自転車」とであると指摘されている。

ドアの鍵は、職業を持ち、家庭に束縛されない生活を送る女性の印であり、結婚していても、他の男性と協同で仕事をこなす女性が描かれている。次に、主義のために煙草を吸う、という行為がある。煙草は男性と同等であることを他人に知らせる手段として用いられている(Fig.1)。「新しい女性」の服飾は、テーラーメイドのドレスにあらわされている。これはスポーツ服として用いられていたが、多くのドレスメーカーが製作し、既製品としても販売することによって活動的な女性の衣裳として日常着に取り入れられた。

「新しい女性」をテーマとした劇評を検討した結果、女性の新しい生き方や新しい意識は、煙草を吸うなどの行為と、テーラーメイドの衣服を着ることにあらわれていたことが明らかとなった。

### (2) ショールの観相学

19 世紀のヨーロッパで広く流行した観相学の視座を応用し、衣服と着用者のキャラクター(心理、性格、本質)の関係を探った。ターゲットとした衣類はショールである。サンプルとして取り上げたのは、高級ファッション雑誌、*The Ladies' Cabinet of Fashion*(1832~70)である。同誌は、上層中産階級の女性読者を主要読者としていた。1862 年号掲載のドレスとショールを組み合わせたスタイルは、スカートにはフラウンスが付き、それを黒レース三段でトリミングしている(Fig.2)。このショールは、着用者が社会的、経済的に高い地位にあるだけでなく、洗練されたファッションセンスを持っていることを効果的に示すだろう。

人の内面を外面から読み解くことができるとする観相学の視座が、外出着の定番アイテムであるショールにまで活かされていることがわかった。女性誌が提案したショールには、それぞれターゲットとする主要読者にふさわしいキャラクターが表象され、読者はこれを参照しながら、セルフイメージを構築し、各々が生きる社会にふさわしいキャラクター表象を試みたことが予測できた。

### (3) アウトドアファッションの流行

1890 年代は、新しい女性の登場や、サイクリングの流行、女子教育が普及した時期で、女性を取り巻く環境が様々な意味で新しさを含有していた。1896 年に創刊された *The Lady's Realm* のアウトドアファッションからは、極端に細く締め上げられたウエストに象徴されるように、機能美を表象するよりも、むしろシンプルさのなかに「進歩的な女性」のための新しいファッションの誕生を感じとることができる(Fig.3)。1890 年代のアウトドアファッションを愛用する新しい女性たちは、シンプルな新しい衣服を装うことで、結婚や仕事に対して、新しい考えを持つという、その進歩的な生き方を表象していった。

### (4) 女性のためのレジャースポーツ

19 世紀後半の銃猟や釣り、登山といったカントリーでのレジャースポーツはアッパーミドル階級以上に受容されたスポーツであった。レジャースポーツによる女性の身体活動は、1890 年代半ば以降、より大衆的なレジャーとしてサイクリングが流行することで、女性層に大きく拡大した。その中で、レジャースポーツ用のノーフォーク・ジャケットやイトンジャケットは、サイクリングドレスとして数多く採用された(Fig.4)。女性雑誌では家庭裁縫を指南する記事の中で、簡易な仕立てで構造線が単純化されたものが紹介された。

レジャースポーツでは、女性たちのライフスタイルと身体表現の意識の変容について検討した結果、デザイナーが設計した衣服には機能のみならずと服飾の構造線による身体表現という服飾の二面性があり、服飾設計と身体表現の関連について明らかになった。

(5) ジャポニズムの影響

西洋文化における日本文化の影響について表現された雑誌記事を検討すると、1880年代後半から1890年代にかけて、屏風や飾り棚、日本人形など、日本の物品についての紹介記事や広告がみられるようになる。*The Young Ladies' Journal* には日本風の服飾を着た女性がモチーフの新聞入れが紹介されている(Fig.5)。

当時の趣向であるジャポニズムを背景として、それまでの西洋の服飾とは根本的な構成が異なる日本の服飾が、それを纏う身体についても着用者に問うものであったことが明らかになった。



Fig.1 The New Woman 新しい女性  
*The Queen* (1894)



Fig.2 Dress and Shawl ドレスとショール  
*The Ladies' Cabinet of Fashion* (1862)



Fig.3 Walking Costume  
ウォーキング・コスチューム  
*The Lady's Realm* (1896)



Fig.4 New Eton Coat  
新しいイートン・コート  
*Lady's Companion* (1899)



Fig.5 Newspaper-pocket  
新聞入れ  
*The Young Ladies' Journal* (1889)

3. その他:ヴィクトリア朝に関する研究会の開催状況

第1回研究会:2010年11月10日「ヴィクトリア朝女性雑誌について」川端有子(日本女子大学教授)

第2回研究会:2010年12月10日「19世紀イングランド女子教育について」滝内大三(龍谷大学教授)

第3回研究会:2012年1月21日「ヴィクトリア朝の階級制について」新井潤美(中央大学教授)

## 主な発表論文等

「雑誌論文」

佐々井啓、「19世紀末イギリスの舞台衣裳にみるNew Woman-『タンカレイの後妻』を中心に」、*日本家政学会誌* 64 卷 3 号(2013)

坂井妙子、「『虚栄の市』におけるカシミア・ショールのディスコース」、*国際服飾学会誌* 40 号(2011)

山村明子、「19世紀末イギリスにおけるイートンジャケットの流行に関する一考察」、*日本家政学会誌* 62 卷 7 号(2011)

米今由希子・杉澤麻美子・佐々井啓、「19世紀後半イギリスにおける子どもファンシードレス」、*日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科* 19 号(2013)

米今由希子・佐々井啓「19世紀後半のイギリス演劇にみる日本の服飾」、*日本女子大学大学院紀要* 18 号(2012)

好田由佳、「自転車に乗る女性ーヴィクトリア朝後期イギリスと明治時代の「新しい女」ー」、*堺女子短期大学紀要* 46・47 合併号(2012)

「口頭発表・ポスター発表」

佐々井啓・坂井妙子・好田由佳・山村明子・米今由希子、「ヴィクトリア朝の服飾表現にみる女性の自立と身体観の研究(1)(2)ポスター」、*日本家政学会* 第 63,64 回大会(2011・2012)

山村明子「19世紀イギリス女性のアンダーウェアとしての脚衣 口頭」、*日本家政学会* 第 64 回大会(2012)

山村明子、「イギリス 19 世紀末のサイクリングコスチュームにみる「優雅さ」口頭」、*日本家政学会* 第 63 回大会(2011)

「国際会議ポスター発表」

佐々井啓・米今由希子:*Japanese Costumes in British Musical Comedies, the Mikado and The Geisha, The 25th International Costume Congress, Taiwan, 2012*

## 参考文献

Margaret Beetham, *Magazines of Her Own* (London: Routledge, 2006).

Margaret Beetham and Kay Boardman eds., *Victorian Women's Magazine* (Manchester and New York: Manchester Univ. Pr., 2001).

Rosy Aindow, *Dress and Identity in British Literary Culture, 1870-1914* (Surrey: Ashgate Publishing Ltd., 2009).

Christine Bayles Kortsch, *Dress Culture in Late Victorian Women's Fiction* (Surrey: Ashgate Publishing Ltd., 2010).

Mrs. Eric, Pritchard, *The Cult of Chiffon* (London: Grant Richards, 1902).(London:Ward,Lock,1876).

*How to Dress on 15 pounds a Year* (London: Frederick Warne, 1873).